

南摩羽峰曰。余亦曾舟下保津川。其奇景危狀。目驚神慄。屈指已三十餘年。今讀此篇。句々飛動。字々靈活。能寫其真。使人復瞿然驚悸。何等藻思。何等筆力。

土屋鳳洲曰。寫景諷幻。筆飛墨舞。真是奇絕之觀。

張袖海曰。寫難狀之景。恍如石破天驚。濤飛海立。耳聾目眩。性寂情移。可謂善於形容矣。

和歌

消夏漫吟のうち

溪川生

雲はたゞ峯にのこして大空にいよ／＼清き月の色かな  
我宿の萩の初花咲きにけり鹿のなくねも頼まるゝ哉  
虫のねもふけゆく月の下かげに我親ひとり誰れ思ふらん

ある人の臺灣へ赴任するに

君かため射向ふ道と天地の神にゆく手をたゞ祈る哉  
故里の友なる或航海者が歌をと

いひて扇をおこしたれば、

世をよその山には住まし中空の月とふたりの大和田の原